

とあらはにひきあげられたるを、とみにひきなをす人もなし、

〔源氏物語三十五〕春宮に參り給て、中略木、六條の院のひめ宮の御かたにはべるねこそいとみえぬやうなるかほして、おかしうはべりしか、はつかになんみ給へしとけいし給へば、ねこわざとらうたくせさせ給御心にて、くはしくとはせ給ふから猫のこゝのにたがへるさましてなはべりし、おなじやうなるものなれど、こゝろおかしく人なれたるは、あやしくなつかしきものになん侍るなど、ゆかしくおぼさるばかりきこえなし給。

〔璫囊抄五〕猫ヲ乙ト云ハ何ノ故ゾ

虎ヲ於ヲ菟ト云也、然ニ猫ノ姿并ニ毛ノ色似虎、故ニ世俗猫ヲ呼テ於ヲ菟ト云へバ、猫則喜ト云り、中略猫ヲ差シテ虎ノ名ヲ呼ハ悦コブ覽、サモアリヌベキ事也、猫ハ鼻常ニ冷シ、夏至ノ日一日ハ暖カ也、惣ベテ旦ト暮ベト目睛圓シ、午ノ時ハ細クシテ如線ト云リ、

〔世事百談〕手飼の虎 山猫

虎と猫とは、大小剛柔ははるかに殊なりといへども、その形状の相類すること絶えてよく似たり、さればわが邦のいにしへ、猫を手がひの虎といへること、古今六帖の歌に、

あさちふの小野のまの原いかなれば手がひのとらのふし所なる、また源氏物語女三宮のくだりに見えたり、唐土の小説に、虎を山猫といふこと、西遊記第十三回、韜虎穴金星解厄といへる條に、伯欽道風响、是個山猫來了云々、只見一隻斑爛虎とあり、形似をもて互に異名とすることおもしろくおぼえたり、

猫性質
猫形體

〔本朝食鑑十〕猫

集解、源順曰、似虎而小、能捕鼠爲糧、必大野○平謂、本邦古來宮中多愛之、頸纏錦繡、著金鈴、或名之、以美稱喚、懷抱弄之、有黃白黑駁數色、狸身虎面柔毛利齒、以長尾短腰上齧、多稜者爲良、能捕鼠、凡捕鼠得